



ひょうご人権ジャーナル

KIZUNA

# きずな

特集 **多文化共生**

## 多文化がつくる 新しい未来

INDEX

- 2 日本よさを発信したい  
パトリック・ハーランさん(芸人・タレント)
- 3 ともに暮らしている/  
暮らしてきたということ  
榎井 緑さん(大阪大学未来戦略機構第五部門  
未来共生イノベーター博士課程プログラム 特任准教授)
- 4 「共に生きる」社会を実現するために  
求められる「同じ」であること  
鈴木 江理子さん(国士舘大学文学部教育学科 教授)
- 5 日本での安全・安心な暮らしを  
支えるために  
ひょうごラテンコミュニティ(神戸市)
- 6 多文化共生に向けた地域の取り組み  
～国籍や文化の違いを壁にせず、  
共に生きる～  
久保 美和さん(NPO法人多文化センターまんまるあかし 理事長)
- 7 生きづらさを抱えた方を地域の輪で  
兵庫県地域生活定着支援センター「ウイズ」(神戸市)
- 8 情報ぶらざ



Photo うへ山の棚田(香美町)



国際化の進展に伴い、在留外国人や海外からの旅行者が増加する中で、助け合い、共に生きることの大切さは誰もが認識しているものの、日常生活においては、異なる言語や習慣、文化等の理解不足などから、さまざまな人権問題が生じています。

本号では、日本人と外国人が互いに理解し、関わり合うことができる多文化共生社会の実現について考えてみましょう。

この人に  
聞く!

## 日本のよさを発信したい

芸人・タレント  
パトリック・ハーランさん

パットンことパトリック・ハーランさんは、1993(平成5)年の秋に来日。福井県で英会話講師をした後、役者をめざして1996(平成8)年に上京。芸人をめざしていたマックンと出会い、お笑いコンビ「パットンマックン」を結成します。現在、芸人・タレント・コメンテーターとして幅広く活躍のパトリックさんに話を伺いました。

**日本に来て驚いたことや戸惑ったことは**

驚いたことに、日本人は、米国人と

同じように、洋服を着て、車にも乗り、瓦と畳はあるが普通の家に暮らして、思っていたほど「異国人」っぽくありませんでした。何より、みんな外国人にとても親切でした。日本のことを詳しく知り始めてからの方が、戸惑うことも多かったです。

**言葉の壁や文化の違いを感じたことは**

山ほどあります。社交辞令にはなかなか慣れませんでした。例えば、名刺を交換した時に、「今度、事務所に遊びに来てください」と言われて、実際に遊びに行ったことがあります。また、「あれ、やった?」と聞かれ、「誰が?何を?いつ?どこで?」と戸惑ったこともあります。

また、日本語の会話は、情報が省かれることが多くて困りました。

**日本で暮らして思うことは**

仕事にプライドを持ち、地味な作業でも笑顔でちゃんとやったり、頼んだら快くやってくれたりするのは、日本人らしいと思います。また、

安いお店でも絶対に衛生的で、割れていないきれいなお皿においしい料理を盛りつけて出してくれるし、居心地がいいです。

**多文化共生社会を実現させるために大切なことは**

相手が違っていて当然だと思っこと。「自分と違う」と言って怒るとか、遠慮するとかではなく、「自分と違って構わない!」とまで思えるようになることだと思います。

自分を尺度にして人をはかると、他人の本当の凄さに気付かないし、自分の欠点も見えませぬ。違いを楽しめないとしたら、鏡と付き合うだけになってしまいます。

日本は、本当に素晴らしい国だから、もつと日本に自信を持ってほしいと思います。同時に、改善点を見つけて直していけば、もつともつと世界がうらやむいい国になれます。

**日本で活躍する一人として今後の抱負は**

もつともつと日本のことを知りたしいし、日本の内外のみんなに知ってもらいたい。日本について学ぶ一人でありながら、伝える一人としてもがんばりたいです。



### Profile

1970(昭和45)年生まれ。米国コロラド州出身。ハーバード大学卒。芸人・タレント・コメンテーター・司会者。「報道プライムサンデー」(フジテレビ系列)、「外国人記者は見た+」(BS-TBS)などに出演中。著書に『世界と渡り合うためのひとり外交術』(毎日新聞出版)など多数。

# ともに暮らしている／ 暮らしてきたということ

大阪大学未来戦略機構第五部門  
未来共生イノベーター博士課程プログラム特任准教授

榎井 縁 さん



## 外国人労働者の増加

20年前と比べて100万人以上が増えたという日本の外国人数は、2017(平成29)年末で256万人を超え、過去最高を示しています。先ごろNHKが「外国人「依存」ニッポン」という特集を組みましたが、最近は大都市圏よりも地方での外国人の増加率が目立っており、日本の人口減少を補う労働力として多くの産業に従事しているといえます。特に、担い手不足が深刻な20代〜30代で見ると、農業では14人に1人、漁業では16人に1人、製造業では21人に1人を外国人が担っており、九州、沖縄、東北、北海道などでの増加率が際立ち、現在は地方で第一次産業を支える大きな力となっているそうです。

## 日本社会の一員となる外国人

ただ、もう少し鳥瞰してみると、1990(平成2)年代から激増しニューカマーといわれた、当初「労働

者」として入ってきた外国人たちも、家庭を築き、次世代を育て、それぞれに日本という社会に根を張って暮らしています。法務大臣が無期限に日本での永住を認める「永住者」という在留資格を取った人は、在留外国人全体の3割にあたる75万人になります。また、植民地支配という歴史的経緯を経て6世代にわたって日本で暮らす日コリアン等の数は、特別永住者33万人、日本国籍取得者を入れると70万人ほどになります。つまり150万人以上の外国から来た人々は世代を超えて日本社会の一員となっているのです。この現実を、ニッポンが依存する「外国人」というより、国籍や民族、宗教や文化の異なる人々が、お隣の〇〇さんとして地域で暮らしてきたし、これからも暮らしていくということを示しています。

## 違いを超えて豊かな地域社会をめざして

世界はグローバル化しているといいますが、それは海の向こうのこと

だけではなく足元の地域(ローカル)

にも起き「グローバル」と表現されるようになりました。多様な国々から来た人が地域で暮らすのは「グローバル」な現象であり、実はわたしたちが四半世紀以上前から経験してきたことなのです。

次世代を担う、生まれてくる30人に1人は外国につながる子どもです。その人たちの辿って来た道(ルート)を認めあえるような関係をつくることは、だれもが暮らしやすい安心で安全な、持続可能な地域づくりにつながります。違いを排除の理由にするのではなく、違うからこそより豊かな地域社会をつくるのが今求められているのではないのでしょうか。

## Profile

フィリピン草の根民衆運動との出会いから大学卒業後ネパールで活動、チベット難民児童の教育支援団体を設立。中学校教員、神奈川や大阪で在日外国人の調査研究をした後、とよなか国際交流協会でも多文化共生の地域づくりを実践。現在は大阪大学大学院で研究をしながら「共生」を実践できるグローバル人材を育成している。

## 子ども多文化共生教育の 推進拠点 子ども多文化 共生センター

「子ども多文化共生センター」は、すべての児童生徒が互いを尊重し合い、多様な文化的背景を持つ外国人児童生徒と、豊かに共生する真の国際化に向けた教育の取組や外国人児童生徒の自己実現の支援をコーディネートするなど、多文化共生社会の実現をめざす教育を推進するために活動しています。

外国人児童生徒等に関わる教育についての相談は、お気軽にお問い合わせください。

### お問い合わせ先

〒659-0031 芦屋市新浜町1-2(県立国際高等学校内)

TEL 0797(35)4537 FAX 0797(35)4538

MAIL mc-center@hyogo-c.ed.jp

●利用時間 平日(月曜日～金曜日) 9:00～17:00

●閉館日 土・日曜、国民の休日、年末年始

●教育相談

電話相談 開館日の9:00～17:00の間

面接相談 予約制 ※必要に応じて通訳が同席します

メール相談 上記アドレスへ。



# 「共に生きる」社会を実現するために 求められる「同じ」であること

国士館大学文学部教育学科教授

鈴木江理子さん



まだ残っています。

「人間としての権利」は同じ  
異なる文化的背景をもつ者が「共に生きる」ためには、二つの視点が重要です。すなわち、お互いの「違い」を尊重しつつ「同じ」人間として対等な関係を築くということです。ここでは、「同じ」に着目して、「共に生きる」社会を考えてみます。

人権とは、文字通り「人間としての権利」です。その一方で、国民国家において、国民の権利と国民ではない者（＝外国人）の権利は、同じではありません。それゆえ、二つの世界大戦という不幸な経験に対する深い反省のもと、国民であるか外国人であるかにかかわらず保障されるべき人権の重要性が強く認識され、国際人権条約の制定が進められていくことは、周知のとおりです。

日本においても、1970（昭和45）年代末以降、自由権規約や社会権規約、難民条約及び議定書の締結・発効を通じて、外国人の権利が拡大しましたが、制度的不平等はい

対等な立場で社会参画するために

ニューカマー<sup>※1</sup>の増加とともに、彼／彼女らが直面するさまざまな問題解決をめざす市民運動が活発化し、総務省も地域における多文化共生を推進しているにもかかわらず、この30年間、制度的不平等はほとんど改善されていません。

社会の多文化化に応じて、何が合理的な不平等で、何が差別的な不平等であるかを見直し、差別的な不平等を是正していく必要があるでしょう。例えば、外国人が義務教育の対象外であること、地方公務員の採用や任用に国籍条項があること、外国人に地方参政権がないことは、合理的な不平等といえるのでしょうか――。

さらに、2017（平成29）年に公表された法務省の外国人住民調査からも明らかのように、雇用差別や就職差別、入居差別やいじめなど、オールドタイマー<sup>※2</sup>を苦しめた差別

## Profile

博士(社会学)。認定NPO法人多文化共生センター東京理事、NPO法人移住者と連帯する全国ネットワーク副代表理事、かながわ国際交流財団理事、移民政策学会理事・事務局長等を兼任。移民政策や人口政策などを研究するかたわら、外国人支援の現場でも活動。単著に『日本で働く非正規滞在者』（明石書店、平成21年度冲永賞）、共著に『外国人労働者受け入れを問う』（岩波ブックレット）など。

が今なお解消されていません。そして、これら制度的不平等（制度の壁）や実質的不平等（心の壁）、さらには言語的不平等（言葉の壁）によって、労働市場や教育達成などに格差が生じ、異なる文化的背景をもつ人々が「対等な（同じ）」立場で社会参画することを阻んでいます。

真に「共に生きる」社会を実現するためには、三つの壁を越えるための取り組みに加えて、格差を実質的に解消するためのポジティブアクション<sup>※2</sup>の導入も検討すべきではないでしょうか。

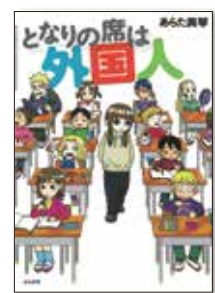
※1 戦後新たに来日した外国人（ニューカマー）に対して、植民地支配の歴史的背景をもち、戦前から日本に居住する者及びその子孫を、オールドタイマー（オールドカマー）とよぶ。

※2 女性や民族的マイノリティなど、社会的構造の差別によって不利な状況に置かれている集団に対して、その不平等を実質的に改善するための優遇措置のこと。

## きずな図書館

### となりの席は外国人

著者／あらた真尋  
発行所／株式会社ぶんか社



この本は、関東地方の在留外国人の多い地域の小学校で講師をしていた作者が、実際に体験した異文化交流のエピソードを漫画化して描いた作品です。

ークラスに5人は外国人の子もいるこの小学校では、家庭訪問や毎日の連絡帳のサポートをする通訳の先生がいたり、一年生は英語の名前もひらがなで書いたり、言葉や文化の違いを超えて共に過ごす日々の様子が描かれています。

外国人児童たちは、とても個性的で、日本人では考えられないようなことを「当たり前のこと」として行動するので、担任である作者も先生達も困惑してしまいます。でも、彼らの行動を温かく見守り、フオロ―し、同じ学校で共に学ぶ仲間としてごく自然に受け入れてくれる先生たちの姿に、言葉や文化の壁を越えた、心のつながりが感じられます。

ユニークに描かれた小学校での日常生活を通して、互いの文化を理解し、受け入れ、共に過ごすことの楽しさや大切さを気付かせてくれる作品です。

# 日本での 安全・安心な 暮らしを支えるために



メンバーのみなさん  
大城さん(左から2番目)

## ひょうごラテンコミュニティ(神戸市)

神戸市長田区海運町3-3-8  
たかとりコミュニティセンター内  
TEL&FAX 078(739)0633  
URL <https://www.hlc-jp.com>

全国に約8万人いるスペイン語圏出身者の支援を行うボランティア団体「ひょうごラテンコミュニティ」。「ワールドキッズコミュニティ」(阪神・淡路大震災をきっかけに立ち上がった外国人支援団体)内の一組織として2000(平成12)年から活動を始め、2011(平成23)年4月1日から独立した団体として活動を行っています。

代表を務めるペルー出身で日系3世の大城ロクサナさんに話を伺いました。

**悩んでいるのは、自分だけではない**

大城さんは、1991(平成3)年の来日から4年目、阪神・淡路大震災で被災。日本語が理解できず、状況がつかめなまま不安な避難生活を送りました。2000(平成12)年に、長男が小学校へ入学。毎日の宿題や学校からの便りの読み方について地元の市民団体に相談をしたことがきっかけで、「自分と同じように日本語がわからず苦労している同胞の力になりたい」と活動を始め、2011(平成23)年に「ひょうごラテンコミュニティ」を立ち上げます。今は、南米出身者や日本人

のスタッフが中心となり、スペイン語圏出身者に対して無料情報誌や地域FMラジオ放送による生活支援、母国語教育を行うとともに、日本とラテンアメリカの文化交流を進めています。

**日常生活に、必要不可欠な情報を届けた**

ひょうごラテンコミュニティでは、スペイン語圏出身者向けの無料情報誌「ラティーナ」を毎月1万2千部発行。日本語がわからず、周囲の人とトラブルになったり、誤解されたりすることが多い現状を踏まえ、日本の文化や生活習慣、社会保険や医療など、日本で暮らすために必要不可欠な情報を掲載しています。

また、東日本大震災直後には、かつての外国人被災者であった自身の経験をもとに情報発信に努めました。

昨年、JRS 西日本あしん社会財団の助成を受け、南海トラフ地震を見据えたスペイン語



スペイン語  
防災ガイド本



無料情報誌  
「ラティーナ」

の防災ガイド本も作成しました。情報誌やラジオ放送は、ニーズに沿った内容になるよう、寄せられる相談をもとにテーマを決めています。大城さんは、必要な情報が手に入ると期待する人がいることが励みになると語る一方、自分にとっても日本での生活にプラスになることが多いと話します。

**新しい世代によりよい未来を**

大城さんは、日本で暮らす外国人に一番必要なのは、日本語が理解でき、日本の生活や文化、ルールが分かるようになることと考え、支援に力を入れています。一方で、若い世代には、ラテン系ルーツをもつというアイデンティティをなくさず、母国の言葉や文化も大切にしてほしいと願っています。

「国籍に関係なく、お互いを理解すること」「一人ひとりが、自分に何ができるかを考えて行動すること」が多文化共生のまちづくり、よりよい未来づくりには大切だと言う大城さん。「これからも活動を続け、新しい世代によりよい未来をつくりたい」と抱負を語ります。



# 多文化共生に向けた地域の取り組み ～国籍や文化の違いを壁にせず、共に生きる～

NPO法人多文化センター  
まんまるあかし理事長  
久保美和さん



## みらいを育てる

日本語・教科学習支援教室「みらいのきょうしつ」に賑やかな笑い声が響き、笑顔が溢れます。ここは学習の場だけではなく、外国人と外国にルーツを持つ子どもたちの居場所にもなっています。

日本は、外国にルーツを持つ人にとっては生活しづらい社会だと感じます。教室の生徒たちも、日本語や日本特有の生活習慣や文化が理解できず、地域社会へ溶け込みにくいと言います。地域からの孤立はとても心細いものです。そんな彼らを支えたいと私達の活動は始まりました。

教室で支援にあたるのは、主婦や会社員、退職者など地域の人たちです。日本語や教科を教えるのは簡単ではありません。予想もしない質問が飛んできて答えに窮することもあります。また、子どもたちへの支援は日本語や教科学習だけには留まりません。時には学習を脇に置き、

悩みにひたすら耳を傾けることもあります。

日々成長していく子どもたちの支援は大変なこともあります。が、共に笑い合える時間がとても愛おしく、彼らの未来の役に立てることを願って真摯に取り組んでいます。

## 世界とつながる

活動メンバーには外国人の友人を持つ人が多いです。私も街中で、外国人の友人とばったり出会うことがよくあります。しかし、地域の人からは「明石には、外国人はほとんどいないでしょう?」と言われることがあります。あまり関わりを持っていない人には、外国人は見えていないのかもしれない。

それなら、地域に住む人と地域に住む外国人が気軽にお互いを知り合える機会を作ろうと、「外国人によるお話し会」や「多文化交流イベント・ワールドフェスタあかし」等を開催

## Profile

神戸山手女子短期大学(現神戸山手短期大学)教養科卒業。2008(平成20)年から8年間、明石市国際交流協会に勤務。在職中に日本語・教科学習支援教室「みらいのきょうしつ」を立ち上げ、外国人と外国にルーツを持つ子ども達への支援活動を開始。2016(平成28)年5月、活動を拡充するためNPO法人多文化センターまんまるあかしを設立。現在理事長。

## 笑顔でより良くつながる

法人名の「まんまる」には、私達の活動を通して、国籍や文化の違いを壁にせず、社会がより良くつながって欲しいという想いと、すべての人々、特に子どもたちに笑顔でいて欲しいという想いを込めました。未来がまんまるになるように、私達は活動を続けます。

## きずな映画館

### 子どもが教えてくれたこと

難病で娘を失った経験を持つ監督が、病氣と闘う子どもたち5人の日常を切り取ったフランスのドキュメンタリー。



©Incognita Films - TF1 Droits Audiovisuels  
監督: アンヌ=ドフィーヌ=ジュリアン  
2016年フランス映画、80分  
7月14日からシネリーブル神戸で公開  
お問い合わせは、078(334)2126

5人の子どものたちは、静脈に薬を定期的に注入する装置をずっと背負っていたり、入院したきりで週末しか家に帰れなかったり、苦しい透析を続けていたり、その日常は他の子どもより制限と苦痛が多く、不意に、言いたいような不安のうちに、病は幼い心をとらえます。痛くて辛くて泣いてしまつこともあります。見ているこちらにも辛くなります。しかしだからといって、彼らが健康な子どもよりも不幸だとは思いません。

屈託のない笑顔やお気に入りの玩具で遊ぶ手つき、友達と駆け回る姿を見ていると、彼らはあくまで自然体で、輝かしく貴重なあたりまえの子ども時代を精一杯に生きていることがわかってきます。「病氣でも、自分次第で幸せになれる」と語る主人公の一人、8歳の少年の言葉が心に残ります。

病氣や障害を持つ子は不幸なのか? その家族は不幸なのか? 出生前診断の導入で難しい判断をせまられることもある時代を生きる私たちに、子どもたちは、その生きざまを通じて大切なことを教えてくれます。

## 生きづらさを抱えた方を地域の輪で

### 兵庫県地域生活定着支援センター「ウイズ」(神戸市)

「地域生活定着支援センター」は、刑務所などの矯正施設を出所したものの自立した生活が困難な高齢者や障害者を支援することを目的に、2009(平成21)年から全国の都道府県に順次配置されました。

兵庫県地域生活定着支援センター「ウイズ」が開設されたのは2010(平成22)年。出所後の高齢者と障害者が地域で安定した生活を送れるように、地域の支援機関等と協力のうえ支援をしています。

#### 支援対象者の現状

「ウイズ」では開設以来250件以上、矯正施設を出所する高齢者や障害者の支援を行ってきました。対象者は、孤独に生きてきた人や虐待やいじめなどの被害経験のある人が多く、なんらかの生きづらさを抱えている人が少なくありません。また、社会復帰の仕方が分からなかったり、コミュニケーションが上手くとれなかったりして再犯につながり、本来、更生の場であるはずの矯正施設が生活の場になってしまっているという社会的問題も起きています。森森久男所長は、支援対象者の出所後について、

「生活の基盤となる住まいをどうするかが一番の課題。現代は、出所者であってもなくても、高齢者や障害者の受け入れが難しい社会」と指摘します。それだけに、対象の特性に目を向けた、その人に見合った支援に取り組んでいます。

#### 対象者に寄り添った長期的支援

「ウイズ」の支援業務は、「コーディネート業務」「フォローアップ業務」「相談支援業務」の三つです。まず保護観察所からの依頼に基づき、「コーディネート業務」として、退所前に受け入れ先や福祉サービス等に関わる申請支援を行います。次に、退所後、支援対象者や本人を受け入れている事業所等に対して必要な助言や支援を行う「フォローアップ業務」につなげます。これを特別調整といいます。

また「相談支援業務」として、本人やその関係者からの相談に応じる他、弁護士会との連携による被疑者・被告人段階での支援も行っています。「ウイズ」では、保護観察所、行政機関、医療機関、福祉事務所、さまざまな福祉事業所等との連携を図り、本人のニーズと社会が提供できる支援の合致点を探っていきます。

このように、「ウイズ」では長期にわたる支援を行うことにより、対象者を見守るネットワークを組み立てていきます。

#### 地域で共に暮らすことをめざして

「ウイズ」がめざすのは、「地域の中で見守られながら、できるだけその人らしい安心で安定した生活の実現」です。「ウイズ」の支援を受けた人の中には、「自分とかわりがあり、相談できる人がいることがありがたい。その人たちを裏切つてはいけない」と話す人もいます。

森所長は、「出所者の受け入れは地域によっても温度差がある。地域における人間関係づくりや関係諸機関との連携などの環境づくりが何よりも重要。これからも出所者が地域で共に暮らせる支援に取り組んでいきたい」と力強く語ります。



「支援対象者の生きづらさと強みに寄り添って支援したい」と語る森所長

兵庫県地域生活定着  
支援センター「ウイズ」  
(社会福祉法人みつみ福祉会)

神戸市中央区花隈町28-14  
兵庫県遺族会館1階  
TEL 078(367)1560  
(月～金 9:00～17:45)

MAIL  
hyogo-teichaku@flute.ocn.ne.jp  
※まずは、お電話でご相談ください。  
直接の来所相談はご遠慮いただきます  
ようお願い致します。



## 兵庫県政150周年記念事業

# 「ひょうご・ヒューマンフェスティバル2018 in あさご」を開催

8月は「人権文化をすすめる県民運動」推進強調月間です。  
兵庫県では、市町と一体となって啓発活動を行います。  
ご家族、ご友人をお誘い合わせの上、ぜひお越し下さい。

テーマ  
“ひろげよう ところのネットワーク”

入場無料

日時 8月18日(土) 9:45~15:30

場所 和田山ジュピターホール・和田山生涯学習センター (朝来市和田山町玉置)

### アクセス

#### 【鉄道】

■JR「和田山駅」から南東へ約1.5km

#### 【自動車】

■「和田山インターチェンジ」から国道312号を北へ約10分  
■駐車場無料

### 問い合わせ

(公財)兵庫県人権啓発協会  
○詳細については、下記(欄外)までお問い合わせください。

### 出演

- 人権講演会「明日への“笑顔”のために」 清水 健さん (一般社団法人 清水健基金代表理事・キャスター)
  - ステージショー「それいけ! アンパンマン ショー」
  - 地元団体によるふれあいステージ(和田山虎臥陣太鼓、照福こども園)
  - 人権ユニバーサル事業  
車いす体験・フライングディスク体験・知的障害疑似体験等
  - 子ども多文化共生イベント
  - 映画上映「彼らが本気で編むときは、」ほか
- ※他に、ミニSL乗車、福祉団体による菓子・雑貨・野菜等の販売など盛りだくさん。

## EVENT GUIDE

イベントガイド



※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

### イベント名 篠山市 男女共同参画研修

日時 7月6日(金) 19:30~21:00

場所 篠山市民センター2階 催事場1・2

※JR福知山線「篠山駅」から神姫グリーンバス「二階町」下車北へ徒歩3分

内容 演題「ともに暮らす」を考えよう～家庭と地域の男女共同参画から～

講師: 栗木 剛さん (mottoひょうご事務局長)

事前申込不要、手話通訳あり、託児あり(7/2(月)までに事前申込必要)

問い合わせ 篠山市民生活部 人権推進課 TEL 079-552-6926 FAX 079-554-2332

### イベント名 稲美町 ほっとホットセミナー

日時 7月21日(土) 10:00~11:30

場所 稲美町いきがい創造センター2階 多目的ルーム

※JR山陽本線「土山駅」から神姫バス上新田行き「六甲バスター北」下車すぐ

内容 演題「自分らしく生きる」- 性別違和を乗り越えて -

講師: 清水 展人さん (非営利型一般社団法人 日本LGBT協会 代表理事)

事前申込不要

問い合わせ 稲美町教育委員会 人権教育課 TEL 079-492-2550 FAX 079-492-6962

ラジオ関西「谷五郎のこころにきくラジオ」(毎週月曜 10:00~15:00)で、  
14:35頃から「きずな」の記事等を紹介しています。

## HALF TIME



今年2月の平昌オリンピック・パラリンピック。日本人の活躍や数々の名場面が記憶に残っています。その中で、私が一番印象的だったのは、女子スピードスケートの小平選手と韓国の李選手が試合後に肩を抱き合い、お互いの健闘を讃え合う姿でした。同じ競技を通し、お互いを最大のライバル、最高の目標として自分を磨き続けた二人の姿は、

「最高の友」のように、とてもまぶしく見えました。スポーツに限らず、相手を知り、認め、受け入れ、一人ひとりを大切にすることは、言葉や文化の壁を越えて、多文化共生社会を実現していく基本です。小平選手と李選手のようなきらきらした笑顔があふれる社会を県民のみなさんと一緒につくっていきたくと思います。(西村)

